

令和2年度事業報告

I 公益目的事業

(1) 対馬丸記念館の管理運営事業

対馬丸記念館の管理運営に資するよう事業の円滑な遂行に必要な協議を行うために内閣府、県及び厚生労働省(オブザーバー参加)の関係部署並びに対馬丸記念会を構成員とした「対馬丸平和祈念事業協議会」の幹事会(令和2年9月23日、内閣府沖縄振興局:茂木参事官補佐出席)、平和協議会(同11月25日、沖縄振興局:植原調査官出席)を開催した。いかにして来館者を増やして自主財源を確保、もって館の自主運営を実現できるのか、について有意義な意見交換が行われた。

ア 常設展事業

公益財団法人として記念館の展示を通して対馬丸事件の歴史と教訓を伝えながら、2度と悲劇を繰り返さない、繰り返させない「学びの場」「未来へ向けて平和の種をまく施設」として引き続き平和の発信に努める必要があり、その実現に向けて記念館の環境整備に努めた。

環境整備の一環として、記念館開館以来17年間、フル稼働の館内クーラーを総点検した。1階企画展示室の2基はガス漏れの修理、また2階入り口のクーラーは修理がきかず取り替えた。さらに、入館者の安全確保を目指して初めてAEDを設置、使用方法など専門家を呼んで、職員が学んだ。

何より子どもを対象とした戦争博物館としては日本唯一の施設であり、その特色、存在意義を広く周知せしめ、子どもたちにとって平和な時代が永続するよう、努めてきた。

イ 特別展事業

(ア) 「石川・宮森小学校 米軍ジェット機墜落事件写真展」

日本では現在も事件や事故に多くの子どもたちが巻き込まれ、命を落としている。対馬丸事件と同様に一瞬にして、夢や希望に満ち溢れた未来ある多くの幼い子どもたちの命が奪われた「宮森小学校 米軍ジェット機墜落事件」を通して、改めて一人ひとりの命の重さ・尊さを伝え、親子で考えていただく写真展示会を行った。

開催期間：令和2年8月22日(土)～9月22日(火) 31日間

鑑賞者：436人(県内279人、県外149人、国外6人)

(イ) 「第68回全琉図画・作文・書道コンクール那覇秀作展」

沖縄タイムス社主催の全琉図画・作文・書道コンクールにおいて、最優秀賞、優秀賞に入選した那覇市内小中学校の児童・生徒の作品を展示。展示会を通して地域や学校、子どもたちなど多くの人々と記念館をつなげ、子どもたちの生き生きとした表現豊かな作品から、改めて平和の大切さを感じ取ってもらう機会とした。

開催期間：令和2年12月19日～令和3年1月24日（日） 36日間

鑑賞者：646人（県内480人、県外166人、国外0人）

ウ 対馬丸及び学童疎開に関する調査・研究事業

対馬丸事件の歴史に関する資料、証拠の収集に努め、学童疎開に関する戦前、戦中、戦後にわたる世の中の動向や情勢を調査、研究し、常設展並びに特別展の展示資料の充実を図った。また、調査・研究の成果を記念会が発行する刊行物などの基礎資料として活用した。

エ 来館促進事業

対馬丸事件の史実と教訓を広く世の人々に伝えて訴える、という記念会の目的を達成するため、記念館の存在を周知徹底させ、もって少しでも多くの来館者増を図るのは、記念館の最大にして喫緊の課題である。そのため、県内の小・中学校（那覇54校、中北部230校）にワークブック、パンフレットなどの資料を送り、学校行事として記念館を訪れてもらうべく提案した。

(2) 対馬丸犠牲者の追悼と遺族等の福祉の向上並びに地域住民との交流促進

ア 対馬丸犠牲者の追悼と慰霊祭の実施

令和2年度は対馬丸記念館の創設16周年、撃沈から76年を迎えた。ただ、1年を通して蔓延したコロナ禍のため、参加する高齢者の安全面に特段に配慮し、従来とは違う方法で実施した。参拝時間を朝の9時から午後3時までとし、参加者がそれぞれ都合のいい時間に焼香してもらい、出来るだけ密を避ける方法をとった。おかげで不測の事態は避けられ、例年通りの参加者に焼香をいただくことができた。

イ 語り部事業

県内の小・中学校・高校などからの依頼に応じて、生存者、遺族などの語り部によって館

内あるいは県内外で講話を実施しているが、今年はコロナ禍のせいで、その多くがキャンセルとなり、その回数は大幅に減少した。3月中旬現在、講話の回数は48回（昨年117回）。受講者は3,395人（昨年は13,950人）にとどまった。また、県内外からの修学旅行もキャンセルが相次いだ。

ウ 相談事業

遺族、親族などの現況を把握するためそれぞれの家庭へ電話し、課題などを把握した。コロナ禍により直接の訪問がかなわず、電話による調査を強いられた。現在の家族構成、後継者などについて聞き取り、また仏壇の保持者、慰霊祭への参加状況、現在の健康状態などを確認した。実績は37人。

エ 講習会及び遺族と地域住民との交流促進

遺族、親族等が健康で不安なく生活していけるよう、医療関係者などを講師として招聘し、「ちゃーがんじゅー講座」を開催した。

(ア) テーマ 「新型コロナウイルス感染症—知ることから始まる感染症対策」

講師 沖縄赤十字病院副院長 赤嶺 盛和氏
期日 令和2年2月21日（土）
参加者 40人

(イ) テーマ 「シニア生活を、ICTで賢く豊かに」

講師 特定非営利活動法人 シニアネット NAHA（講師：対馬丸記念会副理事長・渡口眞常）
期日 令和3年3月13日（土）
参加者 30人

オ 広報活動

広報誌「対馬丸通信」を年2回発行し、遺族や生存者及び協力会員、那覇市内の全小中学校（54校）、県議会議員、那覇市議会議員などに配布し、関係者聞き取り調査の結果や、慰霊祭など、記念会の活動や記念館の運営状況などを報告した。

(3) 子どもたちに対馬丸の悲惨な歴史を伝え、平和を発信する事業

ア 子どもたちの平和学習推進事業

(ア) 「平和学習推進連携委員会」の開催

那覇市教育委員会指導主事、那覇市内小中学校の平和教育担当の教諭（小中から各 1 人）、平和関連施設職員、対「馬丸記念会理事長の 5 委員からなる「平和学習推進連携委員会」を 2 回開催し、平和教育研修会や平和学習作品展などの実施について協議・決定した。

(イ) 「那覇市内全小中学校平和教育担当者研修会」の開催

平成 25 年度より那覇市教育委員会と共催で開催している、那覇市立小中学校 54 校の初任者を対象とした研修会を 7 月に開催した。例年通りであれば、5 月にも平和教育担当者を対象とした研修会も開催していたが、コロナ禍で 2 年度は中止となった。

7 月の研修会では沖縄県教育庁文化財課資料編纂班指導主事の大城邦夫市による講話や記念館の見学、さらに旭ヶ丘公園内にある慰霊碑・顕彰碑も見学、説明を受けた。記念館の職員による説明を通して、館も含めた公園全体が子どもたちの学びの場となるように訴えた。

(ウ) 平和学習補助教材の制作

令和元年度より 3 年間かけて新たな平和学習補助教材の制作を進めている。今年度は去年行った学校の平和教育担当者や県内類似施設職員への聞き取り調査、県外類似施設へのアンケート調査を基に、子どもたちにとってなじみ深い紙芝居を制作した。

紙芝居は 2 本制作し、1 本は記念館のシンボルとなっている「みっちゃん、えっちゃんのランドセル」を基にしたストーリー。2 本目は奄美大島の宇検村にある対馬丸の慰霊碑から展開するストーリーである。

(エ) 対馬丸事件に関する情報収集

那覇市が中心となっていた情報収集や関係機関との連携を、北部・中部地域まで広げて行っている。令和 2～3 年は対馬丸事件で多くの犠牲者を出した沖縄市、美東国民学校についての情報収集を行い、美東小学校の児童生徒そして先生方に向けて事件の継承を図りつつ、記念館とのつながりを強化していくよう努めている。

今年度は情報・資料収集と、沖縄市教育委員会、沖縄市平和・男女共同課（沖縄市平和大使）、美東小学校、泡瀬復興期成会への挨拶と事業の説明を行った。

イ 子どもたちによる平和活動発信事業

子どもたちが日常的・主体的に平和発信事業が行えるようにすることを目的とする事業として、「平和学習作品展」の実施や「つしま丸児童合唱団」の活動を推進。「平和学習作品展」は、子どもたちが平和学習の取り組みでまとめた作品（平和メッセージや平和新聞、感想文など）を「平和のひろば」（1階）にて展示した。

「つしま丸児童合唱団」（団員数23名）は毎週土曜日、対馬丸記念館にて英語遊びと合唱の活動を実施。6月には「沖縄戦没者追悼式」に参列し、多くの人々へ平和の歌声を届けた。

II 収益事業「物品販売・会議室賃貸事業」

自動販売機3台の販売手数料収入(販売額の20%)があり、また、書籍「対馬丸 沈む」、小説「対馬丸」(大城立裕著)、公式ガイドブック、DVD「もうひとつの沖縄戦」、「対馬丸へー今を生きる私たちから」などの販売収入もあった。記念館会議室又は企画展示室の賃貸も、わずかだが収入があった。

III その他事業「旭ヶ丘公園周辺緑化事業」

旭ヶ丘公園内、小桜の塔近辺に、白い花の咲くクメノサクラ1本を、昨年度に引き続き植栽した(2万5000円)。

IV 法人会計「管理事業」

対馬丸記念館の管理運営を実施するとともに、対馬丸記念会理事会及び評議員会の開催、庶務経理業務等を遂行した。